

平成8年度リーダーズセミナー

H. 8. 8. 3～4

福山平成大学

中四国学生剣道連盟

指導教官 山神眞一

木原資裕

学生責任者 丸尾智之

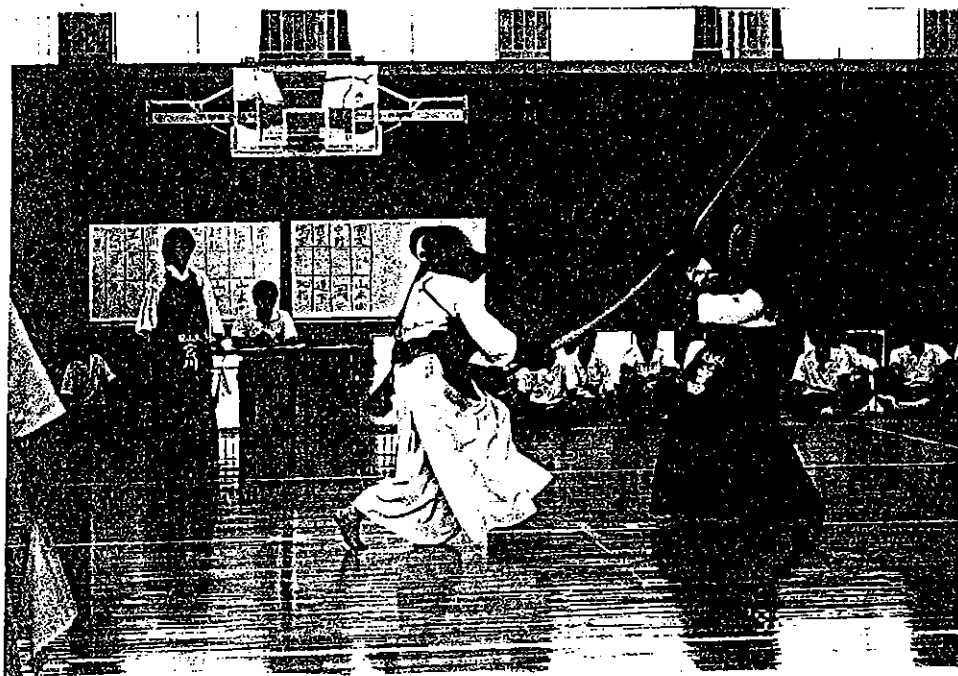
中四国リーダー東西対抗試合 兼審判講習会

今回は、試合はもちろんですが審判のほうにも力を入れて行われました。試合前に山神先生の方から一通り説明していただき、その後試合の最中にいろいろな指摘をしていただくといった形で試合が行われました。審判は出席者全員が行い、審判の難しさを改めて認識した様子でした。特に今回の審判を行う中で『判定』を用いたため、その基準が分からずに戸惑う光景が多々見られました。また『分かれ』のタイミングも難しかったようです。

各大学でも部内で試合を行うときに部員同士で審判をしているようですが、どうしても適当になったりしているそうです。そういった中で、このような機会を持てたことはとてもよかったと思います。

東西対抗試合における最優秀、優秀選手

最優秀選手・・・中野（岡理大） 中島（岡山大）
優秀選手・・・小川（岡理大） 鈴木（高知女）



東	②	②	②	國定 (岡山)	①	山本 ^真 (福山)
宮川 (福山)	②	②	②	鳴家 (高知)	②	北村 (鳴教)
宮本 (島根)	②	②	②	富山 (松山)	②	丸岡 (福山)
笠松 (島根)	②	②	②	松岡 (四院)	②	山本 (福平)
小川 (岡理)	②	②	②	村松 (香川)	②	山下 (広島)
曾田 (広修)	②	②	②	三牧 (広島)	②	廣金 (四院)
東 (香川)	②	②	②	中島 (岡山)	②	鈴木 (高知)
廣川 (松山)	②	②	②	岡本 (下市)	②	岡 (広修)
西	②	②	②	中野 (岡理)	②	山本 ^真 (福山)

リーダーゼミ東西対抗

リーダー選手権

リーダー選手権では前日の審判講習を生かして、自分たちで審判を行い、東西対抗と同様に『判定』が用いられました。各大学の男女共ほとんどが主将ということもあってレベルの高い試合が繰り広げられました。中には判定で負けはしたもののどちらが勝ってもおかしくない試合も数多く見られました。準決勝、決勝では白熱した試合が繰り広げられ、みんな応援のほうもきちんとしてとても盛り上がりました。

今回、他大学の人と試合ができ、またいい試合を見ることができて本当にいい経験になったと思われます。

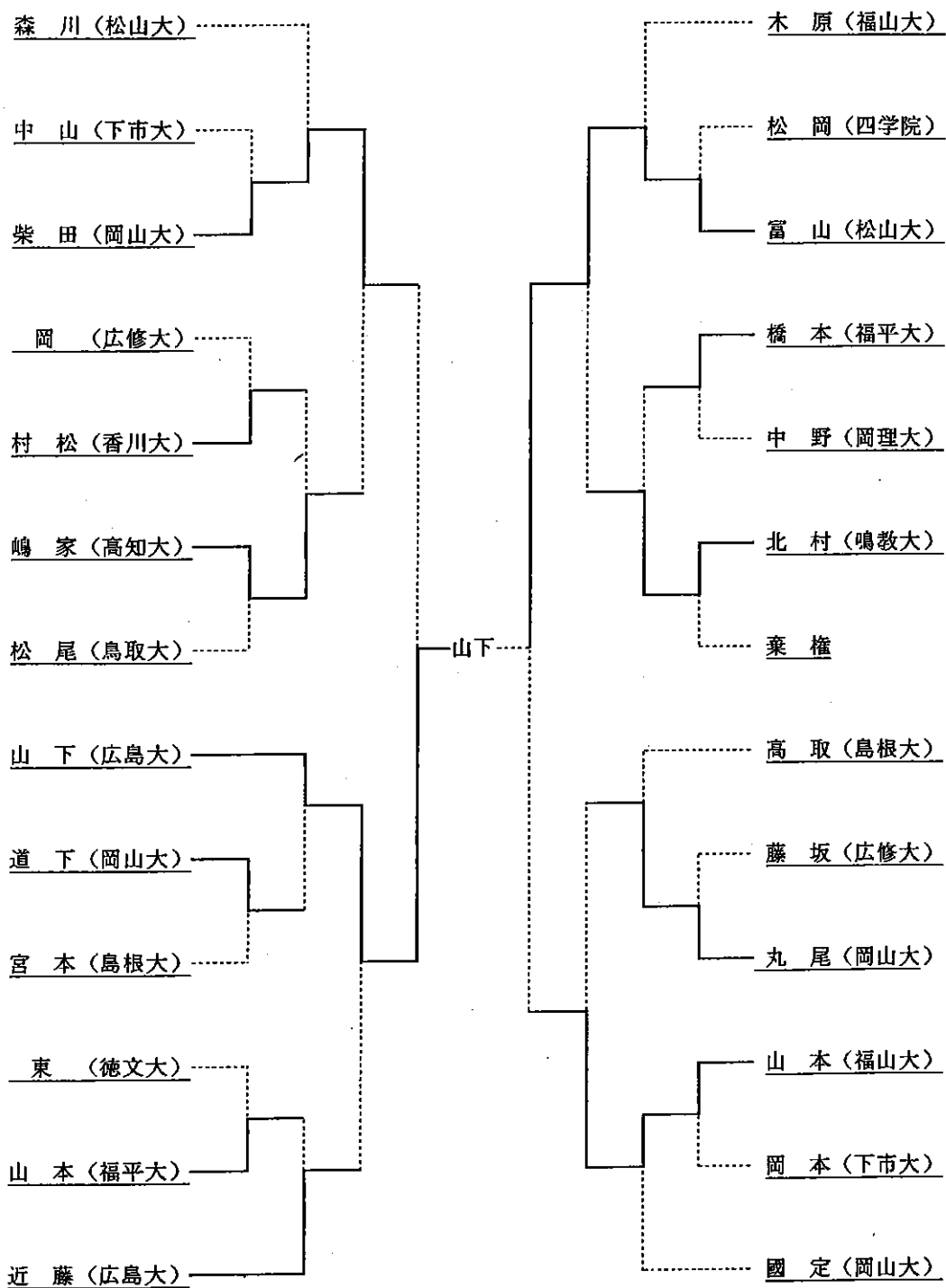
男子 優勝・・・山下（広島大）
準優勝・・・富山（松山大）

女子 優勝・・・伊規須（鳥取大）
準優勝・・・福留（高知大）

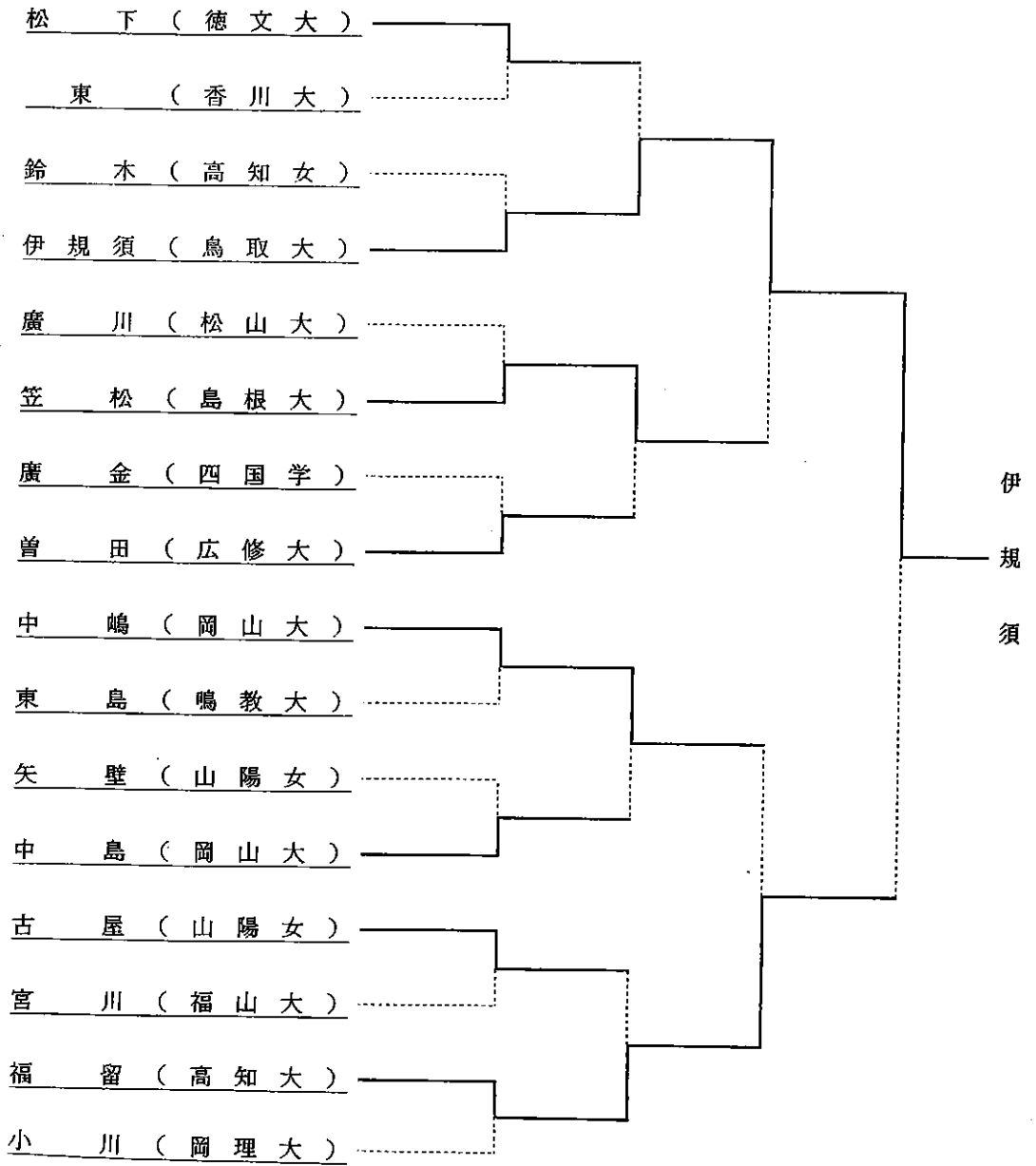


第1回リーダー選手権大会 (男子)

H. 8. 8. 4



(女 子)



講演会

「私と剣道—社会人としての剣道—」

藤江成美先生

私が剣道を始めましたのは昭和39年、私が小学5年生の頃、東京オリンピックの年だったと思いますが、当時は松江城の中に旧武徳殿がありましてそこで剣道の手ほどきをうけました。私が剣道を始めた動機というのは、全く偶然でして、最初は当時、テレビで姿三四郎というのが流行してまして、大人も子供も大好きな主人公でした。私も御多分に漏れず毎週欠かさずテレビを見ていました。絶対に私も柔道をやりたいということで、父にお願いしまして、柔道をならえるところを探してくれといたら、今の松江署の武道場のあったところでしたけれど、子供たちに教えているということでそこへ入門しにいきました。そこで、たまたま私が入門しに行く2、3日前に子供が練習中に腕を折ったということでしばらく子供には教えないということで入門を断られまして、柔道をやるんだ、習い事をやるんだと強く子供心に思っておりまして、しばらく心の中に苛々といいますか、行き当たりのようなものがありまして、そのような気持ちを父のほうが息子を思いやって、たまたま剣道のいい先生がいると、柔道をやるつもりだったかもしれないが、剣道をしてみないか、剣道の方がいいかもしれない、ということを言われまして、心に隙のあったときだったと思いますが、剣道というものはチャンバラぐらいしか知らなかったのですが、うまく父に心の隙をつかれまして、なんとなくやってみようかと、生返事をいたしましたら、次の日に今の武徳殿の方へ弟と二人で連れていかれてまして、何がなんだか分からないうちに今日からこの方がおまえの先生だということで、私の最初の師匠となる上竹玲氏という短針流という古流の宗家の方でその先生に少年剣道チームとしての入門ではなく、古流への入門をし、とりあえず古流への入門ですから総合武術ですので剣道もあり、居合もあり、柔術もあり、鎖鎌などにかく総合武術の宗家の方が、何か知らないうちに父親にはめられまして、弟子入りしろということで宗家の方に弟子入りさせられました。とりあえず、剣道をということで剣道の方だけを私は教えていただきまして父親が転勤族でしたので、転勤していなければ、ずっと松江にいれば、総合武術ですので全部やらされる羽目になっていたのですが、一応小学校を卒業するまでの一年半というのは、剣道をするということで上竹先生の下に弟と二人で弟子入りしました。その後、武徳殿に通うようになって私が意外に思ったのは子供が二人しかいないということで、後は全て大人でした。高校生はいたかも知れませんが、当時の私からみると大人と同じで、周囲は全て大人の世界でした。そこでの稽古というのは、昔の先生は皆そうであったと思いますが、一年半のうち、一年以上竹刀をもって、稽古着も袴も着けずに短パンと普通のシャツで竹刀をもって基本稽古、今での基本稽古、かかり稽古のようなものを一年以上やらされました。今の子供達にそのようなことをするように言うとすぐにやめてしまうかもしれません。けれども、昔のひどい先生ですから。言葉で教えるという

ことはまずありません。こういう様にやりなさいとまず自分で手本を示して、それからやらせてみる、徹底してやらせてみて一言、二言、ここはもう少し柔らかく、みたいなことを言われたと思うのですがほとんど怒られません。徹底して見て、それを覚えさせられるというような稽古でした。そのような稽古を一年以上続けましたけれども子供が私と弟の二人しかいないものですから、子供の程度というのはこのようなものかと、周りで大人が地稽古をしていましたけれども、防具をつけて地稽古をするのは大人で、子供の稽古はこんなものかなと単調な稽古でしたけれども、時々上竹先生が一言、二言本当にいい機会に一言を言ってくれたのですが、その他愛のない一言が本当にうれしくて一年以上休まずに通った記憶があります。最初の師匠が大切だなと32年間振り返る中で山神先生のお話しを受けて、いろいろ考えているなかで特に思ったんですけれども、私が剣道を始めるきっかけとなったその先生の影響というのは非常に強かったとおもいます。特に現代剣道の先生ではなかったので、子供心によく思ったんですけれども独特の武道人としての雰囲気がありました。古流というのは特に形稽古と大切にします。竹刀でやっている素振りについてもその型、形というものを非常に厳しく言われました。竹刀でやっている素振りについてもその型、形というものを非常に大切に言われてきたと思います。その中で特に上竹先生の信念だったと思いますけれども基本という言葉という型、形ということを一緒のような意味のように言われてきて、基本ができないうちはとにかく防具を着けさせないことを試合も地稽古もそのようなものは基本ができないうちはやってはいかんと言われていました。時々武徳殿によそから中学生くらいの子が稽古に来ていましたけれども私たちの武徳殿のなかでは、形の悪いのは剣道ではない、形がよくければいけないと言われてましたので美しくなければいけないというのが子供心の中にありましたので、綺麗でなければ剣道でないというようなことを最初のときから体に染みこまされてきたというのがあります。それが、私が剣道を続けていくうえで非常に私自身の剣道を方向づける言葉になったのではないかと思います。剣道を始めて社会にでてからもずっとそうですけれどもいろいろ思い浮かべてみるとこの最初の先生の影響は非常に大きかったのではないかと思います。それと、私が剣道を恐らく一生やめないだろう、やめることはできないだろうと思う様になったのは、皆さんと同じ大学生のころですが、私が30歳を過ぎるまで剣道を続けて来られた一つの理由は最初の先生の影響と、やはり、大学の時の経験というのが私の中では非常に強かったと思います。これは私の独断的な思い出話なのですが私の決定的な体験というのは大学2年の前期でした。その頃の中四国のレベルというのは、大城戸君という、一人のスーパースターがおりましたけれども、団体戦においては現在の徳山大学、広島大学が活躍しているような成績というのはいま、収めることができないような、全国とは少し離れたレベルにありました。個人的には素晴らしい選手がいたとは思いますが、私の大学の時というのは、どうしても勝ちたい、勝たねばいかん、というような思いがあったんですけれども、私が最初にその指導を受けた先生の影響というのは、どうしても強いなあと思うんです。どうしても、勝負ということを目指してはいるんですが、どこかでやっぱり、綺

麗に勝ちたい、鮮やかに勝ちたい、見苦しく勝つぐらいなら負けの方がいいというような、どうしても割り切れないものがずっと心の中にありまして、まあ大学のときというものはそうですけれども、だいたい試合は勝ったり負けたりしていました。

私が大学のときに目指していたというか、私が大学のときに非常に影響を受けたのは、先輩であります、入学して早々に、当時の幹部から強制的に買われた本がありました。その中の内容というのが、大学のときに私に一番影響を与えました。その本は、もう亡くなりましたけども大判荘園先生という方の剣と禅ということについて書いてありました。その中身というのは、大学生のときには、ほとんど関係ないだろうと、勝負ということについては、ほとんど関係ないだろうという心の問題が大きかったんですが、まあ大学生出すから、ちょっとはいろんなことを考えますので、その本の中で私が一番感銘を受けたというか、はっと思ったのが、昔の名人、達人に話がずっと出てきたんですけれども、その方たちが、剣道に行き詰まってどうしたかという、今日、木原先生も審判法の中で言われましたが、呼吸法という今まで私が聞いたことのない、高校時代まで聞いたことのないようなことがたくさん出てきました。特に中西派一刀流の寺田五郎衛門とか白井とおるといような名人が、呼吸法を通うして、自分の剣道を、剣域問い運ですが、自分の剣道を、真の剣道を作り上げてきたというようなことが書いてありました。何か非常にこの言葉は、私の中に飛び込んできまして、大学に入学した当初です、受験勉強というか受験戦争を経て、非常に開放的になってたこともあります。それと、高校時代までは、どちらかという、好きでしたがやらされていたという部分が、ウエイトが強かったんじゃないかクラブ活動で強制的にやらされていた、というのが強かったんじゃないかと思います。それは大学に入りまして、自分でやるという自主的にやるというような心境になってたからだと思うんですけども、当時18、19ぐらいですから、皆さんよりもっと若いかもしれないんですが、まだ生意気な盛りですから、そういうちょっと精神的なものに憧れるというものがあったと思いますし、最初の師匠の影響というのもあったと思いますし、いろいろに影響されまして、その呼吸法ということに非常に興味をもちまして、その本の中にある超呼吸鍛練法という呼吸法を自己流ですけれども、その2年、1年以上に渡って自分の寝る前の20、30分くらいずっと続けてやっていたことがあります。そのことによって本当にそんな、名人、達人になれるなどとは思わないのですが暇ですから寝る前の30分はなんて事もないので自分で工夫して呼吸法というのをやっていました。で、やってみますとこれはもういろいろな面白い現象がでてきます。これは単に私の幻覚に近いことかもしれませんけれども、超呼吸鍛練呼吸ですから、吐く息は長く、吸う息は短くということなのでやっていると自然と呼吸が長くなるのです。慣れてくると、一分間に恐らく一呼吸くらいでいけるのではないかと思います。それができきますと、体の芯が温かくなってきます。もうすこし進みますとそれが、呼吸が長く限界を超えるぐらいやっていると目の前が真っ赤になりまして、模様のようなものが見えてきます。それをまたやってみますと、呼吸をしているのですけれども

何か自分が呼吸法をやっているということを忘れて2、30分のもりが気づいてみると朝だったということが1年くらいしているうちにできるようになります。

そのようなことがいろいろあるうちに、大学、高校のときは比喩物にならないくらいの多さのかかり稽古をやっていました。高校のときと違うのは、かかり稽古をだいたい楽しんで、かかり稽古をやるのは当たり前だという、かかり稽古をやらないと一日が終わらないというようにかかり稽古が体に染み付いていました。そんなことが重なったと思うのですが、大学2年の前期に私の目標としていた先輩と立ち合いをしているときに今まで感じたことのないような状態に陥りました。というのは、相手と私の様子をもう一人の私が自分の後方から見ているのです。それで、非常に二人の動きがスローに感じたのです。勿論床の上にいるのですから、堅い床の上なのですが、足元が妙にかるいというか雲の上を歩くというのはこのようなものかという感覚を味わいました。それから後、相手の動きが予測できる、打つ前にこう打てば決まるという打つ前にわかる、それから、この感覚が一番私の余韻として残っているのですけれども、竹刀が手に吸い付くようななどんなにでも速く振れるのですが、自分の手の、体の一部の様な感触、感覚を味わいました。これは皆さんもあるとは思いますが、何か得も言われぬような心地よい手応え、手を離すのがもったいないような感覚がこの2時間の稽古の中でずっと続きました。この感覚を味わったときには疲労感はなく、この2時間というのは、全く疲労を感じませんでした。その立ち合いをやりながらですね、なんだかもう楽しくて仕方がない、生きてることが本当に楽しい、そういう気持ちの中で稽古を始めて、楽しさの余韻の中で稽古が終わったという体験をしました。それは、わたしにとって強烈な体験で、これで自分はもう一生剣道をやめられないだろうというような感覚を味わいました。それで、大学のときに、一番剣道をしていたんですが、それに近い感覚が試合のときにちょっと出ましたが、これほど強烈に、長時間、この感覚が続いたことは、残念ながらもうありません。しかしこの一回の体験です、わたしは恐らくもう、剣道をやめることはできないな、剣道から離れることはできないな、というような気がしました。私のその今言った最初の師匠、それから大学のときの体験が、私を剣道をやめずに続けてこられた二つの大きな要素じゃないかなあと今までのことを思い浮かべながら、本当に考えます。それで、こんなことを人様に言っても仕方がないので言ったこともなかったんですが。この呼吸法を通じて、恐らく成果があったと思うんですけれども、何というか、恐らく昔の名人、達人というのは、こういう状態にいつでもなれる人、もしくは、なれる確立の高い人ではないかと、私も一人の凡人ではありながら、まあ名人、達人とは別物ではなくて、同じ延長線上にはいられるんじゃないかなと、稽古を続けていけば、少しでもそういう、何とも言えないような感覚が、増えていくんじゃないかというような気持ちで、ずっと大学のときは、勝負を度外視してやってきた記憶があります。まあそれが良いか悪いかは全然別問題ではございますけれども、考えてみますと、体験というのは、得てして自分の一生を左右するものではないかなあと、今にしては思います。

今回の私の話の中で、社会人としての剣道という、サブテーマといえますか、

それを選んだのですが、その今お話ししたようなことが、私の社会人としてやっていく中で、大きな要素になったのではないかな、とお話しさせていただいたんですが、私が大学を出たのは、昭和51年です。もう20年になります。特に、社会に出て、学生の時と一番違うなあと思ったのは、まず、稽古時間、それから、稽古場所で、この確保というものがいかに難しいかということです。



今、実業団という地位をもっている会社というのはいくらでもありますから、時間も場所もそれから仲間も確保されますけれども私の場合はそういう会社には入っておりませんでしたから、大学を出たときには何もない状態で、まず時間をつくって、場所を探すということで私の社会人剣道は始まりました。私たちが就職した当時、昭和50年代から60年代にかけてというのは、少年剣道の全盛期の頃で、恐らく今の少年剣道の3倍くらいの人口がいたと思います。各小学校、中学校の体育館を利用して、ありとあらゆる所に少年剣道チームというのが成立した時代です。ですから、指導者もものすごく不足していました。私たちが社会人として最初に剣道をやっていくのはそういった道場の指導者となって少年の指導を行った後にその指導者間で稽古をするというのが一般的でした。各剣連によって、県によって、合同稽古とか、武徳殿があるところは、回数があると思いますが、広島県の場合には武徳殿というのがありませんでしたので、あとは体育館の剣道場だけです。ですから、そういう意味では人口の多い都市ですけれども稽古をするということにおいては、私は山口から来たよそ者ですから非常にやりにくい街でした。私も御多分に漏れず、少年剣道の指導者となってやるしかないと会社の先輩の口利きである少年剣道チームの指導者という形で7~8年くらい、その少年指導を通して自分の剣道も続けるということが続けました。今まで人に教えるというのは、大学、高校のときに後輩に指導するという程度で1から教え

ということはありませんでしたのでそれはそれなりに人に教えるという楽しさというのは、無条件に楽しかったです。その楽しさの中には苦しみとか怖さがありました。というのは、子供の吸収力というのは想像を絶するものがありまして、一を教えたら、十を知るくらいすごい吸収力があります。そういったことで、子供の成長の早さ、教える楽しさ、これが本当に楽しい時期がありました。それと共に、子供というのはどちらかというと、指導者のよいところというよりも悪いところ、言い換えると、癖、特徴のようなもの、剣道の本質からいうと癖、特徴というのは欠点でありますから、こういった点をよく見るわけです。これは私も非常に頭を悩ませられました。しかし、それはそれなりに非常に楽しい時期がありました。

私が少年指導に行き詰まりを感じたのはあまりの試合の多さです。恐らく皆さんがその当時の少年剣道の出身者ではないかと思えますけれども、あの当時の試合の多さというのは、ちょっと常識を逸していたと思います。特に私の場合は子供の頃には、防具を着けても試合はおろか、地稽古もしたことがありませんでした。そういうことが特に奇異に感じられ、そういったことは必要ないのではないかと思うような指導者でしたから、基本重視の稽古をさせてみましたが試合というのは年間私共は数試合に絞って参加したらいいと思っていましたが、当時の熱狂的な少年剣道ブームはそういったことを許さない状況にあり、子供達よりも親がすごく過熱してしまつてとにかく試合に出て勝つために剣道をやっているというようになっていました。最初は、剣道をやることによって礼儀を知る、体を鍛える、剣道のいいところ、素晴らしさを身につけるということで親御さんは子供に剣道をさせていましたが、当時の試合、試合の連続ですから、試合に勝つために剣道をするという本末転倒のようなところがありまして、従つて、子供の中で試合に出られるというのは数人に決まっているわけで、当時の少年剣道チームの少ないところでも一団体に50から60人はおりましたから、そのなかで試合にでられるのが5人程度ですから試合に出られる子供は決まってきました。そうすると、部内で試合をしても力の差が歴然としてきます。それで、試合にでられないから剣道をやめるとか、試合に出ている子供も勝っているから剣道をしている、勝てなくなるとやめるといふようになってきます。ということで、小学校で教えていた子供達も中学校、高校でやめ、また大学でやめ、ということでかなりの数の子供達を指導してきましたがそういう少年剣道の面白さを味わいながら、当時のブームの中で指導者としての挫折を味わひまして、なにやらイライラしているときに自分の剣道はどうなのかということを思いを馳せてみますとどうしても大学の時と比べても量も質も絶対的に足りなくなっているのに気づきました。それから、これが一つの景気になったのですが、少年剣道の寒稽古の時期にアキレス腱を切つてしまひましてその時に自分の体力の衰えというものを、もう私は若くはないということをお知らせすることがおきまして、2カ月の入院と剣道を再開するまでの6カ月の間にいろいろと考えさせられましてこのままでは自分の剣道も衰えてしまふ、という現実突き当たりまして、今まで少年剣道の指導に対する行き詰まりがありまして、そのアキレス腱を切つたというのが契機になりま

して、自分の剣道をもう一回やり直さないともうどうにもならない、と思いましたが、私が子供のころから手ほどきを受けた先生や、大学のときの体験などの影響もあります。やはり、剣道を続けるというのは自分にとっては老いてますます盛んになれるからやっているのだ、ということに気づきました。気づくというか、そうあって欲しいと思いました。私が芸事という言葉が好きなのですが、芸事はやはり年をとればとるほど、修行を積みば積むほど、その心境というのはあがる、あがってほしいということが、自分の剣道にもそうあってほしいということか、心の中にあるもので、とにかくもう、このままではいけない、ということで、社会人になってから、8年くらい続けてきた少年剣道を通しての指導者、プラス、自分の剣道をしてきたつもりですけれども、行き詰まりを感じて、結局自分の剣道を見直そう、やり直そうと思って、稽古場所を探しまして、着いたところが、今わたしがやっております、広島朝稽古会という、今は亡き中四国の学生剣道連盟の会長だった大森玄白先生が創られた会で、昭和55年の6月から開いています。広島県には、武徳殿がありませんので、朝早くから出来る施設というのがありませんでした。大森先生と、今の県連に出席していた浜本先生にご尽力いただきまして、広島に朝稽古というものをつくって、年間を通して、誰でも稽古に来られる環境を作ろうということで、今の広島県の中央署という警察の道場なんです。その道場を借りまして、一般人のためにということでは借りられませんので、名目上は広島県の警察官の強化のために、市内の高段者の先生方を呼ぶという名目で、朝稽古会というのをつくりました。私はちょうど昭和60年から今のそういういろんな悩みとか、アキレス腱を切ったこと、自分の剣道に対する取り組みというのをもう一回見直さんといかんと、朝稽古会へ行くようになりまして、ちょうど17年が過ぎました。ここでの稽古は、7時から7時40分までしかありません。しかしその朝稽古のいい所は、その7時から始まる稽古の前に、必ず形稽古をするということです。この形稽古というのが私の一種の、3番目の転機になったんですが、最初私は、形は知っているからというぐらいに思って、やっていなかったんですが、早めに行って皆さんがやっているのを見て、見るだけではつまらないということで、形をやっていましたが、形を始めますと、おのずからパートナーというのが決まってきます。同じ人と形を打つというのは大切ななあ、というふうなことが分かったのは、パートナーがだいたい決まってきたときです。

形を裏表20本打つと、その当時大森先生が座っておられる所というのは、上座のすぐ下の方に座っておられて、今でも、亡くなった後でも、そこは大森先生が座っている席だということで、空けてあるんですが、そこへ、みんなが集まっていますね、一言二言形の講評をいただくということで、やっぱり師匠がいるということの大切さといものを本当に味わったんですが、その一言が、身振り、手振りをまじえて大変ためになりました。

この朝稽古、だいたい35人ぐらい集まりまして、形を打つのが16人ぐらいだだ思うんですが、15~16人の打つ形を非常に良く見ておられて、これはどうしたらいい、これが良くなったという一言をいただくことがものすごく楽しみ

になりまして、形にのめり込んでいきました。ここで、形に対する要求がどんどんエスカレートしてあるとき呼吸法をやってみて初めて分かる相手との呼吸の合わせ方、切る間合いに立った瞬間に相手の呼吸が読めるようになる、それから、同じ相手とやっているわけですから、見た瞬間にその立ち合いの間の遠近が分かる。ここでは遠い、ここでは近い、ということがわかる。それから、呼吸を合わせるわけですから合気になります。そうすると、相手の充実したところや、距離などを感じることができるようになります。また、合気になっていますから、ちょっといたずら心をだして呼吸を乱す、呼吸をはずすことによって相手を崩すということができるといようなことが形の中で芽生えました。それから、形をしまして、し始めた当初は木刀で当然するわけですが、木刀でしているうちにどうしても必然的に刃筋ということが実感できます。刃筋が通った時の手の内、それから、擦り上げ技が決まった、本当に刃筋をつかって決まった時の感触、それは得も言われぬ手応えとなって、ますます形にのめりこまされてしまいます。そうこうしているうちに形も自分に活かされるのだなと思い始めたのが時々ですが、先生方に稽古をつけていただいている時に、相手の打ちを何の手応えもなく擦り上げ、擦り落とし、擦り上げ技が決まってみたり、相手の気分がわかるというか、自分が勝っている、負けているというのが、なんとなく分かるようになり、この朝稽古に行くようになってから、形の重要性、勿論、形だけでなく、朝稽古のいいところはやはり、うまい人にかかって行くことができるということです。先生方ばかりですから、やはり、自分の身近に自分の動きを知ってくれる、身をもって指導態度を示してくれるということで私は師匠の存在というものを剣道を続けて行くうえで非常に大切なものだと思います。



社会人として20年が経ちますが自分の求める理想の場所を見つけたのがここ10年になってからだと思います。朝稽古に参加し始めたときはまだ外様で本当の門下生になっていない、と思いつけて、門下生扱いをしていただけるようになるまでに、通い始めてから3年が必要でした。社会人として自分が今まで20年間続けて来れたのは本当に自分の心の底から要求するものを満たしてくれる場に巡り会えたからではないかと思いつます。皆さんはこれから社会に出られるわけですけれども自分の目指すところ、自分なりの場というものを求められる、見つけられないと、社会人としては剣道をしていくのは難しいと思いつます。試合に求めるものも、稽古に求めるものも、地稽古、かかり稽古でもいろいろあります。全てを含めて求めるのが一番いいのかも知れませんが、皆さんは顔かたちが違うように求めるものは違うと思いつます。その辺の見極めを早めにして自分なりの場を早く社会に見つけてください。そうしないと、社会人としてやって行くというのは、学生では考えられないほど難しいです。特に、教育関係、警察関係にというのであればです。私のように一般企業人としてやっていくには非常に難しいと思いつう。というのが、その大森先生、熊本先生一切合切教えられた気がした。私の場合、どちらかというとその最初の先生の古流の先生の時もありますけど、ここでは本当に剣道形に生きるみたいに剣道形がとにかく面白いということがありました。そうすると形が面白くなって、今の剣道形というものをもう10本しかありませんけれども、もっとないかなと思いつている時にある大会の演舞で柳生新陰流という形を現代21世紀の藪伸晴先生が演じるのを拝見する機会がありまして、その時に電気が走るような感じを受けまして、ビリビリッと特にその当時、現代剣道における地稽古の中で拍子ということを考えてときにそれを柳生新陰流の山河止めの太刀、それを拝見した時にこれだ！と本当に電気の走る思いをしましてその場で無理にお願いしまして、押しかけ入門しまして形稽古をこうして現代剣道と古流、藪先生に言わせると古流というのは嘘だと、柳生新陰流が大元で現代剣道はその一部だと、古流というのではないと、柳生新陰流という剣道を一緒に指導をしているのです。これはなんだか偶然が重なったようですけれども、やはり、最初の師匠の古流の先生に最初から最後まで影響された気がします。幸いにして私の場合はそのような場に偶然ですけど巡り会いました。また偶然といいながら自分で何もかも求めているから巡り会えたと思いつますんで自分の欲求というのはやっぱり自分自身、自分の欲求することは欲求が強ければ強いほど、道が開けてくるんではないかと思いつます。長々と話したけど、これはあくまで私の自分の思いです。ですので皆さんの理に沿うようなことはなかったかも知れませんがまがいなりには、中四国のOBとして社会人になりました。20年間まあこういう形で、剣道続けて来ました恐らく死ぬまでで続けて行くだらうと思いつます。まあ自分の剣道を、また老いてますます盛んな剣道をめざしたい。と思いつます。私の話を終わります。

リーダーゼミにおける反省

1. 短歌 or 俳句
2. 東西対抗兼審判講習について
3. 講演について
4. 懇親会（コンパ）について
5. リーダー選手権大会について
6. その他

高知大学 主将

3年 嶋家健市

1. 福山に 来てよかったよ リーダーゼミ
2. 実際に試合の中での講習だったので、一連の流れでできて審判所作などを覚えられたと思う。しかし、今問題の分かれのタイミング、つばぜりなどのポイントにはあまりふれていなかったのが今後詳しくやればと思う。応援もきちんとやるべきだった。
3. 非常に興味がある話だった。形や古流など自分は全然勉強したりしていないが、少し勉強してみようかと思った。藤江先生の剣道そのものにも魅かれた気がする。美しく勝つという理想を自分も捨てたくないし、心の中では持っていた。呼吸法という点では自分はこれを正しくやったことはないが、とにかく興味がわいてきて、これから少し考えてみようと思った。
4. 楽しくまた、他大学の方と交流できてよかったと思う。意味あるものだった。先生方がおもしろく盛り上げていたと思う。
5. 来年も続けていけばと思う。審判も自分たちで行うことによって緊張してやれたのではないかと思う。
6. よい経験ができた。帰ってから生かしていきたい。

1. 稽古より コンパの方が すごかった
2. 東西対抗と審判講習会とを区別して行った方が選手にとって都合がいいと思った。
3. 講演は大変よかったと思う。先生の経験談とは言え自分と重なるところがあり感動した。このような機会を増し、もっと沢山の人に聞いてもらいたい。試合には負けたが、先生の講演を聞けただけでも満足である。
4. 僕にとって、他大学の剣道部の人と集まり、コンパをするのは初めてなので、ドキドキしたが、皆様のお陰で楽しくすごせました。
5. 1日目、満足な結果ではなかったので、今日は頑張ろうと思ったが、やはり力の差がでてしまった。今日の結果を、これからの稽古に活かして行きたいと思う。しかし、1コートだけだったので、時間が長く集中力が続かないのでは。
6. 東西対抗は判定が多かったが、判定の基準が何なのかがよく分からなかった。2日間本当に御苦労様でした。

1. 横向くな 自分で動け リーダーよ！
(君の背中を皆が見ている！)
2. "東西対抗"という名前があって、団体戦のはずなのに、なんか個人、個人の対戦のようだった。まず、バラバラな場所から、メンをつけて出で行くのがまずかったと思う。きちんと、東西で整列して座るべきだった。それと、東西対抗は男女を分けなくてよかったのではないかと思う。
3. 同じ1時間話を聞くとしたら、私はひとりの人の話を1時間聞くよりも、20分ずつ3人の先生の話を知りたい。ひとりの人の話よりも、やはりできるだけ多くの人の考えを知りたい。その方が、ただひとりの人の考えに洗脳されず、比較・検討し、より自分に合うものを探せる気がする。
4. みんなあまり飲まないのが驚いた。でもまあ楽しかった。島根は飲み過ぎと言われた。
5. 試合に対する考え方に差を感じた。しかし、それぞれの試合に対し、全員が拍手をしていたのは素晴らしいと思う。

1. 省略
2. 私は審判をするのが初めてだったので、何も分からなくて、いきなり一番最初に審判をすることになって焦りました。しかし、やはり何回も注意されたけれど、このような機会は滅多に無いので、とても勉強になりました。「棄権」の意味を知らなかったので、訳の分からないポーズをとったりしましたが、あるとき恥ずかしくてものちのち役に立つのでよかったです。
3. 最初は、本当に「自分史」と言う感じで、少し戸惑っていましたが、だんだん深いお話しになって、興味深く聞きました。私は、藤江先生のような体験を全くしたことがなく、本当なのか、と疑いましたが先生のように本当に剣道が好きな方は、やはり違うな、と思いました。私もきれいな剣道を目指しているので、自分なりに工夫して努力していきたいです。
4. 想像もしていないほどの盛り上がりだったので、とても楽しかったです。他校の人ともいろいろ話せて、良かったです。山神先生、木原先生がいろいろと準備してくださっていたのが良かったです。私たちの学校でも、さらにコンパを楽しくしていきたいと思いました。
5. 全員出場する、ということがとても良かったと思います。そして、延長1回の後の判定で勝敗を決めるということで、私のような、普段あまり技の冴えない学生でも勝つことができたのでやる気でした。伊規須さんや福留さんや山下君や富山さんの試合を見て、やっぱりすごいな、と思いました。
6. 私の学校にも、開けた先生がいるといいと思いました。私は代理できたのですが、勉強になったので来て良かったです。やはりリーダーゼミというだけあって、みんなしっかりしているなと思いました。私も「人ごと」という気持ちを捨てて、いろいろな面でしっかりして行きたいと思いました。東西対抗で、最優秀賞をいただいて、うれしかったです。私は他の試合でなかなか結果を出せないなので、こういうことがとてもうれしくて、これからもっと頑張って本当に強くなりたいと思いました。

中四国学生剣道連盟リーダーゼミを終えて

香川大学 山神真一

「先生！今年のリーダーゼミは、8月に実施したいのですが・・・」という連絡が学生責任者から春先に届きました。

今回で3回目となるリーダーゼミ。第1回が平成6年3月岡山大学の主管で玉野青少年スポーツセンターで開催され、昨年3月、第2回が香川大学の主管のもと香川県青年センターにて行われました。それぞれ充実したものとなり、着実に成果を収めました。その意味において、今回は今後の一つの方向性を示す大切な節目でもありました。

鳴門教育大学の木原先生と私が教官としての世話係となり、学生責任者として岡山大学の丸尾君と協議しながら企画を練ってきました。その結果、今回は8月に実施するというので「試合」に焦点をあててプログラムを作成しました。ちなみにそのタイムスケジュールと内容は以下に示す通りです。

初日・・・平成8年8月3日（土）

- | | |
|-------------|--------------------------------|
| 13:30～16:00 | 東西対抗試合兼試合審判法実習 |
| 16:00～17:00 | 合同稽古、着替え |
| 17:00～18:00 | 宿泊所への移動、休憩 |
| 18:00～19:00 | 講演会「私と剣道—社会人としての剣道—」
藤江成美先生 |
| 19:00～21:00 | 懇親会 |
| 23:00 | 就寝 |

二日目・・・平成8年8月4日（日）

- | | |
|-------------|-----------|
| 7:00 | 起床 |
| 7:30～9:00 | 朝食、休憩 |
| 9:00～12:30 | リーダー選手権大会 |
| 12:30～13:30 | 昼食、休憩 |
| 13:30～14:30 | 反省会 |
| 14:30 | 解散 |

リーダーゼミの会場は、福山平成大学（福山大学の姉妹校）をお借りしました。バスの送迎から会場の準備まで主管の福山平成大学の先生方、職員の方々、そして剣道部の皆さんには大変お世話になりました。

それではリーダーゼミの内容について主だった感想と反省を述べたいと思います。

初日は、まず試合審判法を実技を交えながら、審判の基本的な所作を確認したのち、東西対抗試合を実際に参加者で交代しながら審判実習を行いました。試合中でも大事な場面では中断して説明したり、改めさせたりしました。試合者にとっては試合に集中できなかつたかもしれませんが審判実習としては有意義ではなかつたかと思ひます。続く合同稽古では、上級生元立ちで他大学との交流を意図した自由稽古をしました。非常に暑いときでしたが、思い思いに相手を見つけて熱心に竹刀を交えていました。講演をお願いしている藤江先生も参加していただき、大変充実した稽古会でした。宿

泊所に移動後すぐに藤江先生の講演を聴講しましたが、学生達は皆熱心に聞き入っていました。藤江先生の美しい剣道を求めるこだわりと、剣道で学んだところの社会への体現を目指す思い入れを深く感じたのは私だけではなくだと思います。学生からの質問もあり、関心の高さが伺われました。これから社会人となっていく学生にとっては色々な意味で本当に貴重なお話だったと思いますし、社会人になってからの剣道実践の難しさを認識したのではないのでしょうか。その後、早速懇親会に場を移してリラックスしたムードの中、色々な大学間の交流が進みました。途中、ビンゴゲームもあり、木原先生と私が用意した心のこもった商品(?)を提供しました。また、盛り上がったところで東西対抗試合の優秀選手の表彰も行い、微笑ましく楽しいひとときでした。藤江先生にも参加していただき酒を酌み交わしながら、話も弾んでいました。

一夜明けて、二日目はいよいよリーダー選手権大会です。もちろん初めての試みでしたが、男女別にトーナメント方式で行いました。審判は学生同士で行いましたが、昨日の試合審判法実習の成果がでたようで、非常にスムーズな展開で試合が進んで行きました。さすが、中四国のリーダーの大会だけあってどの試合も気迫のこもった素晴らしい試合でした。試合者、審判、観戦者が一体となった有意義な大会だったように思えます。

リーダーゼミの全体を通して反省点として挙げるならば、事前の打ち合わせをもっと入念にしかも早くすべきだったこと。また、参加大学数が加盟数の半数程度であったことからPRをもっとしっかりと行い、理想としては全加盟大学からの参加出席を目指すべきだということです。また、開催時期についても再検討する必要性を感じました。第4回のリーダーゼミのさらなる発展を祈りつつ報告とさせていただきます。

ご講演いただいた藤江先生、お世話いただいた福山平成大学の関係者の方々、そして計画、進行に携わってくれた学生の皆さんに心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

常任幹事 丸尾 智之

今回初めてリーダー選手権を行いました。各選手ともたいへん熱の入った試合内容で、たいへん良かったと思います。より良い学生剣道連盟にするためにはまず中四国学生剣道連盟を発展させることから始めなければなりません。そしてその発展にはまず各大学ごとの自覚、発展が不可欠です。リーダーズセミナーは、まずリーダーの自覚を促すということを目指して行われます。今回はリーダー選手権をはじめとして、審判法、試合法の講習会、藤江先生の講演会、そして交流会などの中で各大学の参加者の意見の交換や交流の場をもつことができたことはその一歩になったのではないかと思います。

今後も中四国学生剣道連盟の発展につながることをどんどん行っていきたいと考えております。

最後になりましたが、会場を提供して下さいました福山平成大学、そして協力して下さいました福山大学の皆様、本当にありがとうございました。